

前立腺生検について

<目的> 前立腺に癌がないか判定するために行います。

<検査名> 経直腸的前立腺針生検、経会陰的前立腺針生検

<前立腺癌について>

前立腺は精液の一部を作る臓器です。天皇陛下をはじめ著名人（三波春夫、森喜郎元総理、渡辺恒雄読売新聞社長など）が前立腺癌に罹患しています。アメリカでは男性に発生する癌の第一位で、日本でも急速に増加しています。一般に進行の遅い癌とされ早期に生命に危険が及ぶ可能性は高くないかもしれませんが、前立腺癌による死亡数は年々増加しています。

直腸診、腫瘍マーカー（PSA）、超音波などで前立腺癌が疑わしい時に生検を行い、顕微鏡検査（病理検査）で癌が証明されれば確定します。年齢や状況によりませんが、PSAが4以上であれば癌の心配があるとされています（注意：PSAは炎症や肥大症など他の要因に影響を受けることがあり、PSAは万能ではありません。担当医とご相談ください）。レントゲン検査（CT、MRI、超音波など）で前立腺癌の有無を診断する事ができずPSAが高値のため生検を行って始めて診断されるケースがあります。

<検査方法の概略>

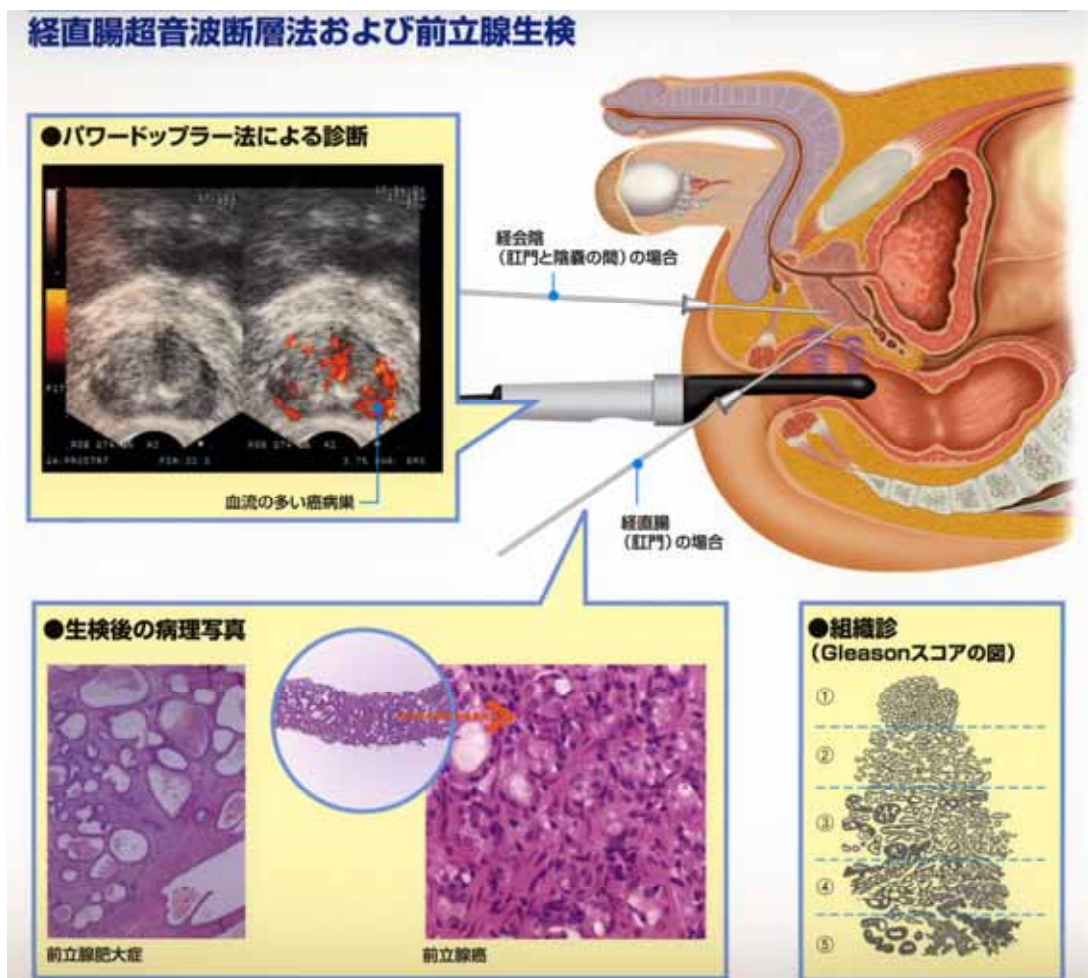
経直腸的生検の場合

安全性を考慮し1泊入院していただき検査を行っています（合併症参照）。入院当日、抗生物質の内服と注射を行います。入院後に担当医より検査の概要について説明がありますので、質問があればお尋ねください。検査は夕方にクリニック2Fの外来検査室で行いますので、病室でしばしお待ちください。検査室でお産をするような格好（砕石位）または横向きをしていただきます。消毒の後に超音波装置をお尻より挿入し、前立腺内部や大きさなど観察します。続いて超音波装置で観察しながら針を刺し前立腺組織を採取します。通常は10カ所針を刺しています。検査時間は10 - 15分程度です。

通常麻酔はなしで行います（麻酔を行う場合は入院期間も延びます）。検査時に痛みを伴うことがありますので、検査施行医に遠慮なくお伝えください。

経会陰的生検の場合

下半身の麻酔を行って検査を施行しますので2泊3日の入院を必要とします。入院翌日に手術室にて行います。術後はベット上で安静が必要になります。検査翌日に問題なければ退院となります。状況に応じ経直腸的生検も併用します。



<合併症>

出血：

針を刺しますので出血（肛門や尿道から出血するとそれぞれ下血、血尿が出現します）の可能性があります。軽いものであれば経過をみて問題ありません。検査後に出血が多いようであれば、点滴（止血剤など）や止血目的で肛門内にガーゼを挿入したり、尿道に管（カテーテル）を挿入する事があります。

感染：

穿刺後に前立腺炎を起こすことがあります。前立腺炎が起こると高熱が出現します。その場合は点滴治療が必要になりますので、再度入院していただく必要があります。血液より細菌が検出された場合は、抗生物質の点滴が2週間程度必要になります。まれに敗血症（菌が血液にのって全身に広がり影響が出た状態）血液の異常（輸血が必要になることや血液が止まりにくくなる特殊な病態）が出現する可能性もあります。炎症が慢性化することも希にあります。

排尿困難、尿閉

検査後に前立腺が腫れることがあり、尿が出にくくなったり尿が出なくなって尿道にカテーテルを挿入しなければならないことが希にあります。

その他：

検査とは直接関係ありませんが、脳梗塞、肺塞栓、狭心症、心筋梗塞など主に高齢者に多い血管疾患がたまたま発症することがあります。いつでも起こりうるものがたまたま入院中に起こったもので、検査が直接の原因ではありません。非常に稀ですが、合併症が生命に関わることもあると報告されています。

<検査後の経過、退院後の注意>

発熱や出血（下血、血尿）がない、または程度が軽ければ翌日退院となります（状況により延期する事もあります）。抗生物質の内服は継続し、水分を多めにとってください。退院後も出血や発熱が出現することがあります。通常、尿の出が悪くなることがなければ血尿は様子を見ていただいて大丈夫です。寒気がする場合は体温を測ってください。38度以上の発熱がある場合は再度入院していただき点滴治療が必要です。必ずご連絡ください。夜間、休日の場合は救急外来を受診してください。

病理検査の結果がでるのにしばらくかかるので、次回外来時にご報告することになります。

<別な方法>

生検を行わないと診断が付きません。前立腺の組織（細胞）を採取する方法として経尿道的前立腺切除（前立腺肥大症の治療として行う内視鏡手術）がありますが、麻酔が必要で入院期間も7日程度必要です。

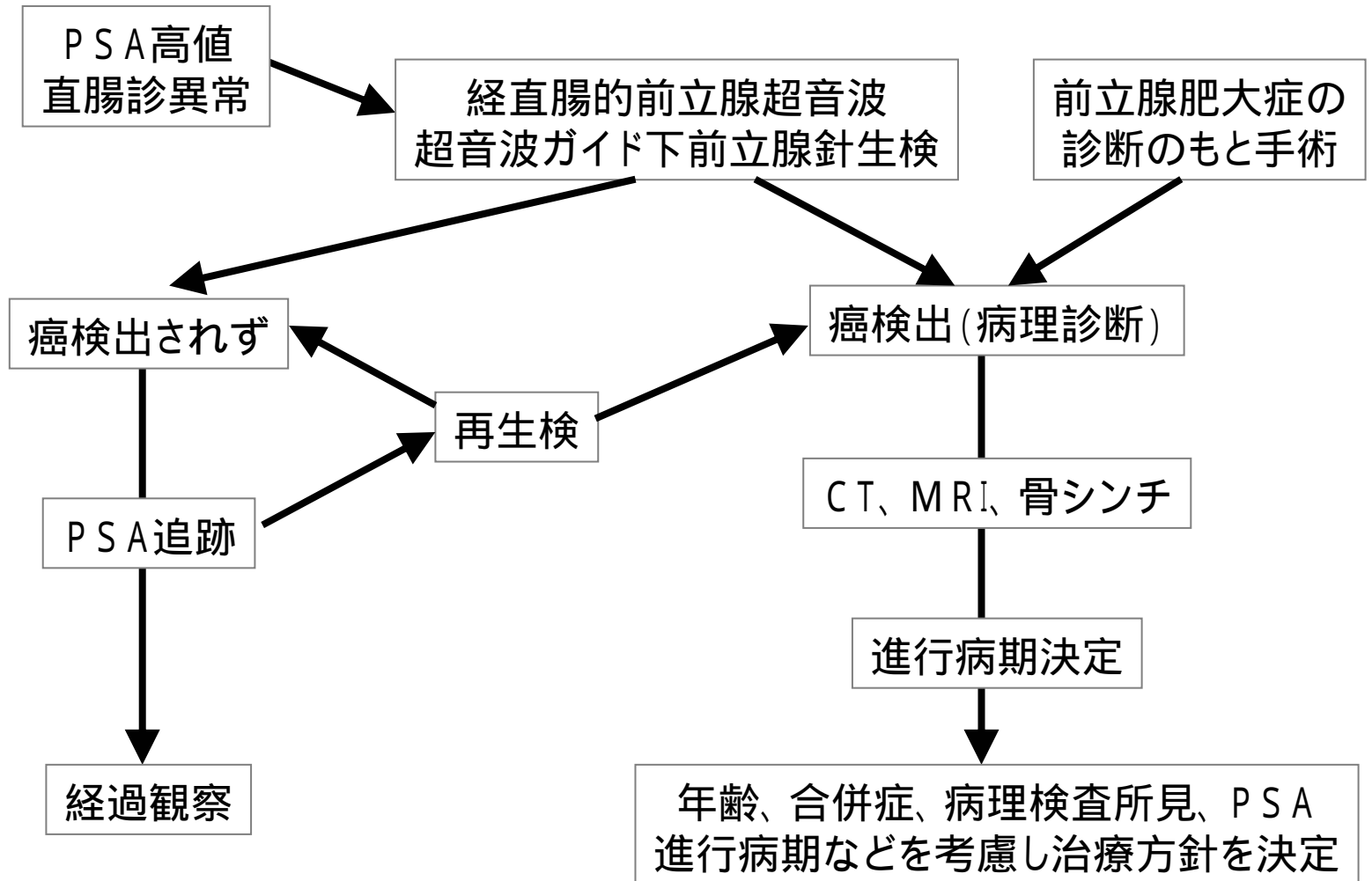
<その他>

入院後に実際検査を行う医師が外来担当医と異なる場合がありますが、どの医師も検査には精通していますのでご安心ください。

普段内服している薬によっては事前に中止していただく必要があるものがあります（抗凝固剤など血液をサラサラにする薬は出血が止まりにくくなるため）。外来担当医に内服している薬をお知らせください。中止の必要があれば何時から中止するか指示いたします。事前に中止されていない場合は、検査を延期することがあります。前立腺に癌があっても生検の結果が陰性となる場合があります。これは癌組織が小さい場合に起こり得ます。結果が陰性でも引き続き外来にてP S Aの数値の推移をみる必要があり、その後の数値によっては再度生検を行うことも珍しくありません。癌が発見された場合は、他の必要な検査や治療方針につき外来担当医より説明があります。

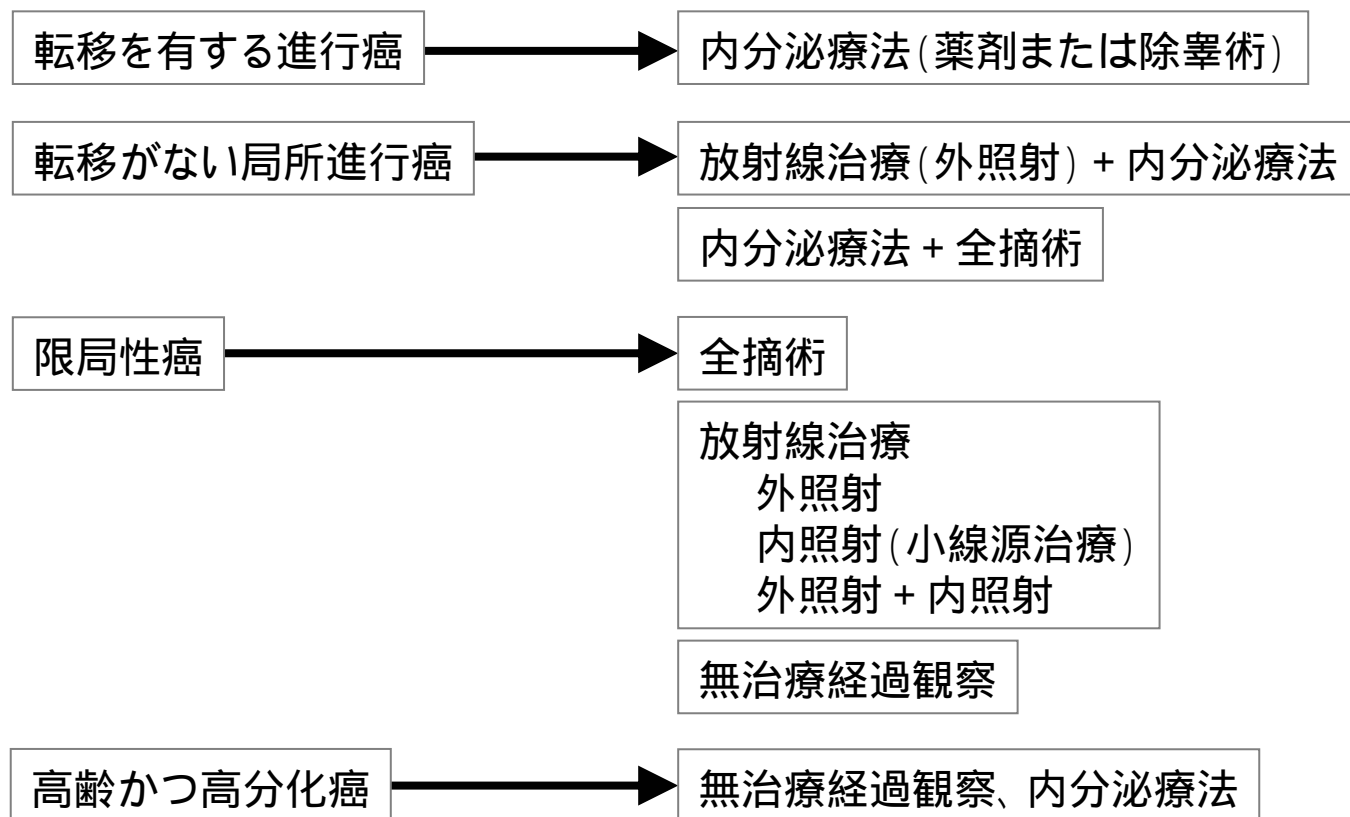
イラストは「泌尿器科アトラスボード（吉田 修監修、バイエル薬品提供）」より転載
2008年1月 亀田メディカルセンター 泌尿器科

前立腺癌の診断の流れ



前立腺癌の進行度と初期治療(概要)

年齢、合併症、病理検査所見、PSA、進行病期などを考慮し治療方針を決定



注:前立腺が大きい人に小線源治療を行う場合は、前立腺の縮小を目的に内分泌療法を先行して行う。